

勿凝学問 339

人生前半とか後半の社会保障ってのは、危なっかしい言葉なんだよね
一利はあるだろうけど害の方が大きそうだから僕は使ったことはない

2010年12月17日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

12月16日締切の『社会保障の政策転換』に関する学生さんのレポートをながめていたら、おもしろいのがあった。

まず、何より驚いたのは、現政権が本書出版当時と「政策転換」という意味での進歩はほとんどないにも変わらず（権丈先生のご指摘はどれも悲しいほど現在ももれなくあてはまるように感じた）、首相の交代劇ばかり起こり、政治が表面上の変化だけに終始していることだ。

...

次に本書の中で私が特に印象的であった点を2つ挙げると、まず1つは、地方を活性化する、中産階級を生む、ということが意図的な働きかけなしには絶対に達成されないということだ。この第20話を読んで頭に浮かんだのが、

...

2つ目として挙げられるのは、コラム（252頁）において語られた子育ての社会化に関してだ。そもそも日本のGDPに占める社会保障全体の割合が他国に対して小さいこと自体、私は社会保障論の講義で教わるまで知らなかった。子育て支援策のために高齢者向けの社会保障から財源を確保するなんて、冷静に考えれば無茶苦茶なことは明白なはずなのに、残念なことに、マスコミが「敵」を攻撃する構図を多用するせいで正論であるかのように根づいてしまう、日本社会の恐ろしさを感じる。

このレポートを読んで、僕が目にしたのは、この2つ目だね。最近、政府の報告書なんかにも出てくる、「人生前半の社会保障」なんて言葉、あれは、ほんつとに危ないんだよね。と同時に、「日本の社会保障は人生後半に偏っていて、人生前半の社会保障を充実させなければならない」なんて言葉を、若い人たちばかりが集まる場で使えば、拍手喝采が起こること請け合いなんだよね——気持ち分かる。この言葉は、「あなたが悪いのではない、あなたがたはもっと報われる権利がある。負担増など必要としないんだから」といつているのに等しいからね。1997年にトニー・ブレアの顔写真が載ったマニフェストには、YOU RESERVE BETTER と書かれていたけど、そういうニュアンスを醸し出す言葉ってのは、

そりゃあ、ウケがいいだろうよ。

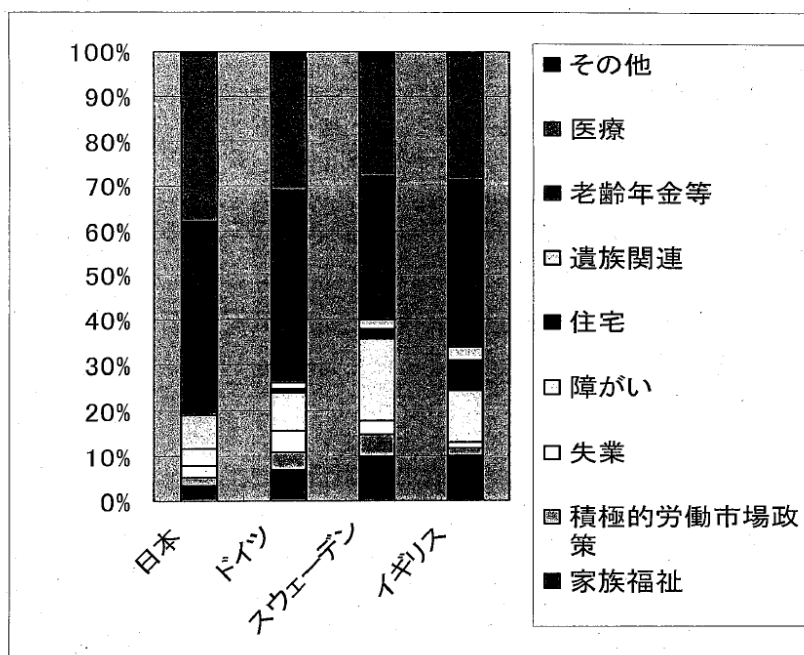
ところで、11月17日の北大シンポの時、僕は、コーディネーターの宮本太郎先生の前で、次のパワーポイントを使って話をしている。



要するに、社会保障給付の中で高齢者給付に占める割合が低いとか高いというのは、それは、社会保障の量の問題だということ。社会保障の規模が小さいときは、高齢者給付の割合や現金給付の割合が高くなる。結局は、この問題は、負担の問題なわけだ。

なぜ、僕がああシンポジウムの日になんかそういう説明を加えていたかということ、その前々日に、宮本先生が民主党の「税と社会保障の抜本改革調査会」で次の資料を使って報告をしていたのを知っていたからである。

3 人生後半に集中していた社会的支出



人生前半とか後半で言葉がはやったら、いたずらに世代間の対立を煽るだけにきまってるじゃないかい。そして、実際、その言葉の普及とともに若者たちは、その言葉に煽られているようでもある。

一昨日の12月15日のBSフジ「プライムニュース」でも、宮本先生は、同じことを強調していたし、この言葉を最初に作ったと僕が記憶している広井良典氏などが、彼らの研究仲間のようなので、そうしたグループに対する僕の昔からの論を再掲しておくよ。

第6回社会保障国民会議 親会議 (2008年6月12日) [議事録](#)

○権丈委員 今、おっしゃられたことと関連することなんですけれども、まず社会保障というのは、高齢期の生活が社会化されていきます。そうすると若年層の生活を社会化しないと意識のずれが出てきて、どんなずれが生じるのかはいろいろな想像をしてほしいんですけども、そうすると高齢期の社会化された制度が攻撃されるようになってきます。ですから高齢期の生活が社会化されていけば、次は子どもはもう社会で育てますよというそこまで踏み込んだ形にしないと、子どもを育てている世代から、今度は高齢期の社会化された制度が攻撃される形になってきて、今度は分断が始まってきて高齢期向けの社会保障の安定性が失われてきますので、それを何とか阻止するために、次にはこの子育て期の生活全体を社会化していく。要するに子どもは全員で育てますよという政策を展開する必要があります。子育ては生んだ人が負担しますというようなことをやっていくと、では高齢期の生活が社会化されていることと矛盾しないのかという形で今度はバランスが崩れていきますので、ですからここは支え手がどうのこうのとか、出生率への政策効果があるのかど

うかという問題もありますけれども、そういうこと以前にやっぱり意識の問題として高齢期の社会制度というのが攻撃される可能性が出てきますので、早いうちに社会化、子育て期の生活というものを社会化する。子どもは社会で育てるんだ。みんな育てるんだというような制度に組み込まないと、ちょっと社会全体の安定が危なくなってくるので、子育ての社会化の優先順位は非常に私は高いと思います。

よく言われている社会保障給付費に占める子育てに対する支出というのが、日本では低いというような形でもまた言われるんですけども、またこれもGDPに占める高齢者の支出というのは、先進国の中で高いわけではない。むしろ低いほうに属している。トータルが低いから、小さいから社会保障全体で見ると、日本では高齢者に優先的にお金が回っているように見えるんです。GDPの比率で見ると、そんなに高くないというか、低いほうに入っているわけで、だから今既にもう高齢期の生活を社会化した制度というか、社会保障制度への攻撃が開始され、勢いを増しそうな雰囲気がありますので、子育てや若年層の生活の社会化は早目にそういう意識の問題としてやっていただかないと、ちょっと危ないなというのを私はそろそろ感じております。

次も、似たような発想かな。

勿凝学問 179 [高齢者医療費の比率を小さくしたいのであれば、分母である 65 歳未満の医療費を大きくすればよし——「高齢者医療制度に関する検討会」での発言メモ](#)

これも関係するかな。

勿凝学問 145 [若い人が政府の利用価値を実感するというとは——映画 SiCKO の中で僕が一番多く人に話をしてきたシーン](#)

あっ、なんで、プラムニュースを見たかった？ その日の「安心社会と経済成長は両立するか？」への出演依頼を断ったんで、そのテレビ番組、どんなだろうと思ってながめたわけです、はい。まあ、やっぱり出なくて良かったな（笑）。

出演依頼とその返事

以前、弊社報道 2001 の編集長をしていた関係で、権丈先生がテレビ出演をお好きでないのを承知の上ですが、添付いたしました。・・・ゲストのお話をじっくり伺う番組ですので、よろしくご検討のほどお願いいたします。

メール拝受いたしました。

テレビはご想像の通りなしですが（笑）、今は、原稿などテレビ以外の仕事も全部なしです。

今の状況下では、政策を論じてなんにも意味がないんですよ。

[さながら、社会保障政策論の暗黒時代ってところだな](#)

これなどもどうぞ。

[私の仕事は「かつて一度も事の成り行きに影響を与えることができなかつた予言」——えにしの会での7分間スピーチ](#)

その後——2011年5月14日

これは、2日前の記事だな。

- [社会保障改革、「世代間公平」打ち出す 厚労省案公表](#) asahi.com

昨年の有識者検討会あたりから、全世代型の社会保障なんてのが言われたわけだけど、彼らが世代間不公平を言う際に問題視している機能別社会保障給付費の「高齢」には、統計上、介護保険は入っているけど、医療は「保健医療」に計上されている。

ということはだよ。介護労働者の待遇改善は、介護給付費を増やすから「高齢」部門が肥大化するため、その政策は世代間不公平を助長するので、そんな政策は止めておけということ、この度、公式に表明したということになるんだろうな。ご苦労なことだ。医療は、高齢者向けの医療だろうがなんだろうが、「保健医療」に計上されるから、世代間公平の問題に抵触しないので大いに増やしてよってお墨付きを与えたことにもなるのかな。だって、彼らが使うのは、機能別社会保障給付費のデータだからねえ。

現状の社会保障制度が世代間で不公平であることを言葉の上で政府が公式に認め、その認識が、これまで以上の勢いで世に流布していく社会で、若者たちが社会保障にどのような意識をいだき、それがどのようなムーブメントを起こしてくるのか。関係者達が、どこまで予測しているのかを、知りたいところだな。

ここで、「さあ考えてみよう」コーナー

若者の生活水準を底上げする際、医療や介護などの現物給付の労働需要を増やすと共に彼らの報酬を引き上げることと、若者基礎年金の創設、どっちがいいと思う？ ただし、介護報酬を上げれば、高齢給付が増え、いわゆる人生後半の給付は増える。

次も参照あれ。

勿凝学問 62 [選択のときへの選択のとき](#)

他にも——次の 83 頁

- 「[医療皆保険 50 周年——その未来に向けて](#)」(61MB)
- [私の発言箇所](#)(13MB)

- 平成 22 年度医療政策シンポジウム
日時 平成 23 年 2 月 4 日（水） 13:00－17:00
場所 日本医師会大講堂

負担の一時的な側面、給付の一時的な側面のみをみて判断をしてはいけない

最近の政府は、若者に対しての給付が少なく、高齢者に給付が偏っていると言う。でも GDP 比でみると他国と比べて高齢者への給付は決して高くはない。ただ単に若者への給付が低いだけ。今後の社会保障の伸び分の多くを若者に回さなければならないことは確かですが、財源を高齢者から若者にシフトすることは、この国では無理がある。負担を増やして、社会保障給付の増加分を、重点的に若者に回すという方向でやらなければなりません。

また、他の視点からみれば、医療とか介護とか、高齢者向けの現物給付を増やしていけば、そこには雇用が生まれ、職を得るのは若者なわけです。この場合には、若者には、再分配ではなく、市場による一次分配として所得が流れることになる。

負担の一時的な側面、給付の一時的な側面のみをみて判断をして何の意味があるのか。お金は流れているという視点は、社会保障政策の全体像を評価する際には不可欠ですので、そうした視点があるということを、是非とも記憶にとどめておいて下さい。